名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第 67 号　2024 年

学校制服の役割と意味
―学校制服の歴史・ジェンダー・学校教育の視点から―

井上　圭子

はじめに

本稿の目的は、先行研究が言及する学校制服に与えられた多様な役割と意味をレビューすることである。学校制服について言及している研究は、学校制服そのものを対象とする研究から、学校教育においての学校制服の意味や位置づけに言及する研究まで幅広いものがある。これらの研究を整理し、社会の動向と要請を受けて変化する学校制服に付与される意味と、学校制服をめぐって存在する多様な視点を整理したい。

先行研究における学校制服への言及は、それぞれの研究が主題とする対象へのアプローチによって異なり、その視点は多岐にわたる。しかしながらいくつかのカテゴリーに分類することは可能である。それらは教育改革、ジェンダー、教師のストラテジー、学校制服そのものへの言及という分類である。それに加えて学校制服が着用される場と、着用する制服の形態による分類が可能である。これは、学校制服の着用の場が限定的であり主に学校とその往復において着用されるということと、さらに男女で異なる形態の制服が定められてきたことを指す。

このような分類によって先行研究を概観したときに、その背後にもう一つの大きな要因が存在することに気づく。それは、学校制服を着用する場である学校や、実際に着用する生徒に影響を及ぼしている社会の変化である。こうした先行研究が指摘するのは、消費社会の拡大でありジェンダーの課題である。これらの研究は学校生活で着用される学校制服について言及するものである。こうした研究の他に学校から去っていった子どもたちと学校制服について言及する複数の研究がある。それはすなわち学校外にいる子どもが学校制服を捉えている視点でもある。

第 1 章では、学校制服の歴史を扱った研究を概観する。第 2 章では、学校制服をジェンダーの視点から捉えた研究を整理する。第 3 章では教育改革と社会の変化の中で学校制服に言及する研究を概観する。第 4 章では、学校を離れた生徒にとっての学校制服の意味を捉える研究に触れる。これらを通して学校制服に与えられてきた意味と学校制服を捉える視点を整理する。

１．学校制服の成立と歴史

本節では、学校制服の歴史を扱った研究について概観する。この研究群に属するもののひとつが学校制服の成立とその変遷に関する研究である。佐藤（1976）は、学校制服の発端である制服の着用について考察している。社会的機能をもつ被服をまとうことは他者からの意味づけを伴う社会的行為であり、まとう者の内面を持続的に統制する社会的統制機能をもつものであると指摘する。このような視点から明治期の軍や官職に導入された制服は、機能的な利便性はもとより成立時から権力と密接に結びついたものであったという。そして、学制発布により創設された学校に用いられた

制服にも同様の意味が付与されたことと男女では学校制服普及の過程が大きく異なることを示した。さらに、女子の学校制服は、その成立過程における度重なる政策の変化とともに社会から向けられる否定的な見方に対応する変更があったことを明らかにした。難波（2012）は、師範学校の学校制服と異なり自弁であった高等女学校生徒の服装の変遷とそれを促した要因を明らかにした。また、女子の学校に広まった自弁の学校制服を捉え、社会と保護者からの要請が学校制服を定める規則を変える力を持つことを明らかにした。学校制服は、服装にまつわる生徒自身や保護者、教師の服装選択の悩みを「一旦不問にし」（p.328）同一の服装を受け入れることで「学校生活における便利や秩序を手に入れる手段として機能した」（p.328）のではないかと指摘している。

女子の学校制服の形態としてセーラー服に着目した研究もある。こうした研究は、学校制服としてのセーラー服の発祥と普及の過程を扱ったものと、ある特定の学校におけるセーラー服の歴史をもとに制服に与えられた意味の変遷を考察したものに分けられる。前者に分類される刑部（2021）は、セーラー服が学校制服として取り入れられた経緯とセーラー服の形態を調査した。これらの形態が学校ごとで異なるのは、それが行政の指示によらずに決められていることの証左であるという。そして、学校ごとに異なる制定過程とデザインを持つセーラー服を着用した生徒の心情から服装観を解明するとともに明治期以降に洋装が定着する過程において学校制服の洋装化が果たした役割を明らかにした。セーラー服は、動きやすさから運動服として導入された。セーラー服が当時の生徒に好まれた背景には、ジャケットなど紛らわしい形の職業婦人の制服と差別化が図れたことがある。セーラー服は、当時のエリートを自負する女学生にとっての誇りであった。後者に分類される井上（2020）は、関西地方の高等女学校を前身とする学校の歴史からセーラー服に与えられた意味の変遷について検討した。この学校のセーラー服の制服の制定にあたり学校は、安く家庭で作ることができるという条件に加えて、生徒の意見を聞き、生徒の好むものを作ろうとした。昭和初期にほぼすべての生徒がセーラー服を着用するが、戦時体制に生地を多く使うセーラー服は徐々に変形を余儀なくされ、ついに学校ごとの制服が禁じられると下級生は上級生のセーラー服を羨んだという。戦後、セーラー服の制服が再興する。学園紛争の時代に制服見直しが検討された際に女子生徒がこぞって反対するほどにセーラー服は生徒に愛着を持って受け入れられていた。後者に分類される馬場（2009）は、学校制服の先行研究は二つの系統に分けることができるとして歴史研究では明治期から昭和初期の制服の歴史と意味が、実態調査の研究からは着用する教師と生徒の意識が明らかにされてきたという。学校制服の研究には教育をとりまく広い視野からの考察と社会状況とを関係づけた制服の役割の究明が必要であるとして、戦後の社会情勢を背景とする公立中学校制服の制定経緯と学校制服の役割を明らかにした。この研究は、戦後の高度経済成長期にかけての産業振興との関連において学校制服を捉え、経済政策が学校制服の在り方に大きく関わってきたことを示している。

２．ジェンダーの視点と学校制服

学校制服成立の歴史は、男女で学校制服普及の過程が大きく異なることを示した。現代まで維持

されてきた学校制服についてジェンダーの視点から考察する研究がある（宮崎 1993，氏原 1996，2009，馬場 2011，土肥 2022）。婚礼衣装に込められた役割と意味に着目し、それと関連づけて学校制服の意味を検討する研究（馬場 2011）、女子生徒が学校制服の着用形態を相互の価値観の違いとして捉えることを明らかにした研究（宮崎 1993）、学校がジェンダー再生産の場とされる要因の一つである隠れたカリキュラムに着目した研究（氏原 1996，2009）、さらにジェンダーに配慮された学校の例（土肥 2022）がある。

採用される学校制服のデザインはジェンダー観を反映し、制服の着用を通して女性に望ましい役割やあり方を示してきた。馬場（2011）によると、女性ファッションが窮屈な服装から女性を開放し、活動しやすい服装に変化する過程は女性の社会進出と関連するものであるとしたうえで、婚礼衣装に含まれるジェンダー差について指摘している。それは、女性に求められる役割を示すものであり、その役割と女性の幸せという価値観を結びつけようとするジェンダー観である。そして、こうしたジェンダー観は戦後の困難な時代においての経済的メリットと並んで、学校生活の規律として男女に求められる異なる役割を象徴する形となって学校制服に付与された。その具体例に男子は質実剛健なイメージの詰襟、女子は清楚なイメージのセーラー服が好んで採用され着用が義務付けられたことを指摘する。この研究では、ジェンダー差が課題とされる現代の学校制服において男女で異なる制服を指定し、その着用を義務付けることについても再考が必要であると指摘している。

宮崎（1993）は、女子高での調査をもとに女子生徒が社会から向けられる性規範を生徒自身の価値観としていることを明らかにした。彼女たちが互いを評価する際に尺度となるものは、グループごとに異なる学校制服の着用形態が暗示する性規範である。それは彼女たちが通う学校に対して社会から向けられるイメージを内面化したものであるという。

氏原（1996，2009）によると、こうした生徒の性規範は学校内において再生産される。それを促す作用を持つものとして学校の隠れたカリキュラムの存在がある。氏原（1996）は、先行研究が学校と教室における隠れたカリキュラムの投影として学力を捉えたことを踏まえて、性と知識の差分、学校の組織構造と役割モデル、教師―生徒関係に焦点を当てた学校―教室における隠れたカリキュラムの要因に目を向けた。そして、ひとたび定着した制度が再生産される過程に着目した研究において、ジェンダー研究の視点による先行研究を参照しながら、学校での社会化には相容れない目的が共存することを指摘した。そして、イギリスを中心とする「ジェンダーと教育」研究をもとにエスノメソドロジーによる解釈的アプローチを用いて隠れたカリキュラムに込められた意味の解釈を行い、男女平等と性差別という矛盾したメッセージが伝えられていることを明らかにした。そのうえで氏原（2009）は、先行研究の分析視座を用いた考察から、隠れたカリキュラムが男女平等メッセージを発する際に教師をエンパワーメントする役割をもつことを指摘した。

学校がジェンダーに配慮した場合の生徒に及ぼす影響に言及した土肥（2022）は、トランスジェンダーが学校で性自認に合ったグループに所属する過程をインタビューから捉えた。制服がなく自由な服装で過ごせる環境で生徒は、特別な行動を取らなくてもグループに所属することができたと述べている。その生徒が通学した制服のない共学の公立中高一貫校ではいじめを許さない姿勢が生

徒に伝わっていた。自分に合う服装ができたことを「恵まれた環境」（p.99）であったと語ったという。

これらの研究は、学校制服には性差による価値観を暗黙のうちに伝達する側面があることを指摘する。同時にそうした価値観をジェンダー平等に変え得る学校の可能性も示している。

３．教育改革の影響を受ける学校と学校制服に影響を及ぼす消費社会

学校制服に言及のある研究には、学校教育の変化の要因を対象とする研究が多数存在する。それぞれの研究対象は異なるがその背景には教育改革の影響と社会の変化を読み取ることができる。教育改革と消費社会の影響による学校の変容を捉える研究（伊藤 2002，稲垣 2004，岩見 1991）、学校制服を家計・生徒の貧困問題、不平等の視点から捉える研究（田中 2001，盛満 2011，志田 2021）がある。これらの研究に加えて生徒指導の実際を教師・生徒それぞれのサバイバル・ストラテジーとして捉える研究（吉田 2007，知念 2012）、教育改革を受けて曖昧な表記となった校則を指導に運用する際の教師の意思決定過程を捉えた研究（鈴木 2016）がある。また生徒の生活空間でもある消費社会と学校制服の関連を扱いながら、実際に学校制服を着用する生徒の心情を考察した研究がある（松田 2005，山口 2007）。

学校教育の個人化に着目した稲垣（2004）は、個人化による学校空間ならびに個人の意味の変化と、虚構化する日本の学校教育の意味合いや教育改革との関連を考察した。そして、社会の市場化に連動したアイデンティティの形成の変化と教育における個人の選択について先行研究を示して指摘する。そして日本における同様の変化への批判を踏まえたうえで、教育においてこの変化が意味するものは、個人を構造的制約から解放するのではなく、むしろ見えにくい制約と選択の結果を個人に引き受けさせる作用であることを明らかにする。この研究は、予め用意された選択肢を選び取る場となった学校を「ショッピング・モール」（p.396）と表現し、選び取る主体である生徒の在り方と学校の意味の再考が必要であると指摘する。ここで言及される学校制服を流行とも無関係な形態で装う生徒の姿はショッピング・モールと化した学校の虚構を表すものなのである。

こうした学校制服の着崩しについて異なる視点から言及する研究がある。それらは学校の持つ強い求心力と権威に対する生徒の反学校的な行動の表れとして捉えたものと、そのような学校が指導として生徒を学校と地域に囲い込む背景を捉えたものである。

伊藤（2002）によると、近代以降の学校は、先行世代の文化の伝達に加えて青年文化の形成においてその役割を果たしてきた。青年文化は若者世代の克服すべき課題を明示する働きを持っていたが、高等学校進学率の上昇に伴いそれは大きく二つに分化する。それは学校を卒業した後の社会的地位と対応する向学校的なものと反学校的なものである。そして学校制服の改造は生徒が発する反学校的なメッセージであると同時に学校に強く執着する姿でもあると捉えられていた。こうした学校の役割と青年文化が大きく変容したのは 90 年代であると指摘する。

青年文化の特徴として戦後社会において一貫して認識できたことに「学校と結びついた生徒文化の側面と、メディアや時代状況などを通じて同世代の者たちと結びついた若者文化の側面の双方が

ある」（p.92）。しかし 90 年代に起きた変化により「青年期に期待されるアイデンティティの確立が困難になり」（p.94）統一的なアイデンティティから離れて自己の物語を持つようになった反面、到達点のない自分探しを始めることになった。この研究は、こうした青年の変化の背景にあるのは教育改革による生徒の学校体験の変化と消費社会であるとする。そして青年の変化に応じるように将来に向けた課題の克服よりも現時点での充足と生徒の居心地の良さを重視するような学校の変化をコンサマトリー化であるという。

学校の求心力の低下と関わって岩見（1991）は、子どもの社会化は地域社会論に代わる都市空間論によって理解できるとする研究において学校制服に言及している。この研究では、都市の拡大によって子どもと都市との関わりに変化が生じているとして、子どもが大人になる過程と意義に着目し、社会化の多源性を都市構造に関連づけて考察する。ここでの学校制服には、生徒が消費社会の表れである都市へと越境するのを防ぐ働きがあるとして、生徒の行動を規制する役割が与えられている。この研究は、学校教育で伝達される文化の遅滞性を課題としながらも、社会と文化の変容が学校の役割にも変化を与えているのだと指摘する。

教育の不平等をテーマとする研究は、家計・生徒の貧困問題、家族規範に着目した研究（田中 2001，盛満 2011，志田 2021）がある。学校制服に係る費用は一般的に家計によって賄われている。

総務庁（当時）の『家計調査』から教育費の家計に占める割合を算出した田中（2001）は、高等教育在籍者と家計を関連づけた分析を行った。そして世帯の経済状況が高等教育進学を決定する要因であることを示し、不平等改善の必要性を指摘している。

盛満（2011）は、労働者階級や貧困層の子どもは自身の権利を主張することを自ら制約する感覚を持つとする先行研究の指摘を示し、参与観察を行った。そして、学校制服の綻びをきっかけとして生徒の貧困を発見しても、学校と教師は「特別扱いしない」（p.273）方針を持つことを明らかにした。生徒への働きかけを省みない教師のまなざしが含む差別的な意味と、そうした学校の「特別扱いしない」姿勢は子どもを低学力・低学歴に押しとどめている一因であると指摘する。

社会階層によって生じる教育の不平等について志田（2021）は、階層と教育に着目したフィールドワークからひとり親家庭の生徒の学校との関わりを考察した。そして、そうした生徒が学校に確保されている居場所に遅れてやってきた際の理由として、制服が壊れてしまって他を探していたと友人に話す場面を紹介している。この研究では、参与観察における生徒の姿は主体的に困難を跳ね返す力を持った存在として捉えられている。

学校のコンサマトリー化に伴い必要となった現代の教師のストラテジーは、吉田（2007）によると、かつての画一的な規制と逸脱への制裁を用いて行われていた指導システムが変化を促されて出来上がったものである。そして日常会話の記録とインタビューをもとに生徒指導の実態を分析し、それが集団的な統制から個別的統制へと変化したことを明らかにした。さらに学校教育に馴染めず逸脱しやすい生徒に対する学校のストラテジーとして生徒に寄り添い、直接ぶつからないように、規定を外側に置いた生徒指導があることを示した。逸脱しやすい生徒の学校生活を考察する研究を行った知念（2012）によると、先行研究が示す教師のサバイバル・ストラテジーは、困難校におい

て教室のなかで生き延びることを主眼とする教師の振る舞いであるという。そしてストラテジー研究は、生徒の学校経験を対象とする研究と海外に例のあるクラスルーム研究が重要であることに加え、生徒の視点に立って検討する視点が重要であると指摘する。そして、進路多様校での生徒との関わりのフィールドワークから教師が生徒の逸脱した行動の意味を理解し尊重することによって、生徒を教育活動に巻き込んでゆく教師のストラテジーを明らかにした。そして、そうした教師の働きかけは将来に向けた生徒の選択肢を広げる可能性があると指摘する。この研究での学校制服は、自身に馴染みのある学校外文化を校内に持ち込む生徒のストラテジーとして言及される。こうした行動は、生徒を理解しようとする教師にとっては重要なメッセージとなるのである。

鈴木（2016）もまた日本の学校教育の指導の特徴を示し、コンサマトリー化した学校の規則は表記が曖昧であり、指導との対応関係を示しにくいと指摘する。こうした課題について先行研究を提示して説明している。そして、制度としての規則に依らない事象の発生に際して教師が取る同調的な行動に対する文化論的アプローチによる見方を批判的に検討し、エスノメソドロジーによる分析を行い、教師が導き出した結論が明文化された規則よりも優越性を持つことを明らかにした。その際に教師は互いに明文化されてはいないが指導の対象となる事項（不文指導事項）を共有していることを確認している。

ここまでの段落では、学校教育の様々な側面から捉えられた学校制服の諸相を捉えた先行研究をレビューしてきた。ここからは、消費社会の影響を受けた生徒の制服着用に焦点を合わせた先行研究を取り上げる。

松田（2005）は、先行研究と自身の調査をもとに学校制服発展の過程と生徒の制服着用の現状を分析した。学校制服の発展の過程における画期は、大衆消費社会と子どもの教育に責任を持とうとする親たちの出現であり、その後、学校制服への関与を強めてゆくなかで、保護者の期待とニーズに応じてそれを実現する場へと学校を変化させたと指摘する。学校制服の現状を捉える著者の調査は多くの生徒が学校制服を必要としていることを明らかにした。学校制服を必要とする生徒の意見として最も多いのは、登校時の服を選ばずに済むことであった。こうした消極的な制服必要論について消費社会とアイデンティティに関する先行研究を参照し、消費する余裕があるとしてもその行動は自由だけでなく自己を作り上げる責任を負うというストレスを伴うものであることを示した。

また、高校生の制服おしゃれに着目する山口（2007）は、学校制服に関する先行研究の傾向を踏まえて、制服を着用する女子高校生がどのように感じているかを対象とする研究を行った。そして新たに時代区分を捉え直し、現代の学校制服の位置づけを再定義した。そして現代の女子高校生の制服スタイルを「制服おしゃれ」（p.62）としてその意味を検討するとともにメディアと先行研究の分析をもとに実際に着用する女子高校生の心情を考察した。この研究は、女子高校生の制服おしゃれが社会的に浸透していることを示すとともにその形態の特徴が学校制服によって表現される点に注目し、制服おしゃれは彼女たちのよりどころのなさを表すものであると指摘した。

消費社会の影響を受けながら学校生活を過ごす生徒は、身近に起こる変化に対応しながら学校制服を自己表現とアイデンティティの確立に用いていた。生徒の自己表現の特徴は消費行動を介して

試行されるところにある。そうした側面が生徒のよりどころのなさを感じさせているのである。

４．学校に行かれない生徒の学校観と学校制服

学校を離れた生徒の学校制服にまつわる発言と学校制服を用いた行動に含まれる意味について扱う研究（森田 2013，内田 2015）がある。

内田（2015）は、サポート校生徒がもつ学校制服着装に対する主観的解釈に着目し、サポート校でのそのような行動が果たす役割と、その行動が生徒に及ぼす影響について先行研究の視座を用いた参与観察ならびに半構造化インタビューとフィールドノートから明らかにした。サポート校生徒は、前籍校を退学または転学して新たな学校であるサポート校に通う。サポート校に在籍する生徒にとって前籍校の制服着装行動は、生徒本人の生活空間において高校中退経験を生き抜くためのものであるが、それは前籍校という社会の価値規範に同調する行動でもある。その背景にあるのは獲得できなかった高校生活の補償と憧れ、そして現状への否定であった。また、そうした行動を通して生徒は高校中退経験を内面化させていた。こうした前籍校制服着装行動は、生徒同士が新しい環境で互いに過去に同じ経験を持つ者であることを示すシグナルでもあった。この研究は近年、高校中退や不登校を経験した生徒が再登校する場が増えたことに言及しながらも、いまだ社会には、社会が望む高校生像があり、それを生徒に期待する風潮が根強く残っている恐れがあると指摘する。

森田（2013）は、デモクラティック・スクールの参与観察と、すでにその場との関わりを終えた生徒へのインタビュー調査から、海外在住経験を持つ生徒が日本に戻ってきて中学校の制服にあこがれて通おうと思ったという発言を捉え、実際には自分に合わなかったと語る姿を示した。

おわりに

学校制服に関する先行研究は、学校制服の役割と意味が社会情勢の変化や社会からの要請によって変化してきたことを示していた。こうした学校制服の側面から影響を受けながらも生徒は、自己を表現しようと試みている。今後も検討を要する課題となることが予想される学校制服研究についてその動向を注視することが求められる。

〔文献〕

馬場まみ, 2009,「戦後日本における学校制服の普及過程とその役割」『日本家政学会誌』60(8):715–722.

————, 2011,「ファッションにみるジェンダー―婚礼衣装と学校制服―」『日本衣服学会誌』54(2):91–94.

知念渉, 2012,「＜ヤンチャな子ら＞の学校経験―学校文化への異化と同化のジレンマのなかで―」『教育社会学研究』91:73-94.

土肥いつき，2022,「トランスジェンダーによる『実践』しない実践―マコトさんの語りから―」『解放社会学研究』36:84-109

稲垣恭子，2004,「市場化する社会における子どもと学校空間の変容」『社会学評論』54(4):386-400.

井上晃，2020,「セーラー服の社会史―大阪府立清水谷高等女学校を中心に―」青弓社

伊藤茂樹，2002,「青年文化と学校の 90 年代」『教育社会学研究』70:89-103.

岩見和彦，1991,「都市化と教育―社会化空間の変容―」『教育社会学研究』48:5-20.

松田いりあ，2005,「学校制服の『生産』と『消費』―ファッション化の経緯および着用の現状―」『ソシオロジ』50(1):35-50,168.

宮崎あゆみ，1993,「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス―女子高におけるエスノグラフィーをもとに―」『教育社会学研究』52:157-177.

盛満弥生，2011,「学校における貧困の表れとその不可視化―生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に―」『教育社会学研究』88:273-294.

森田次朗，2013,「オルタナティブ・スクールにおける『自由』と『選択』―デモクラティック・スクール M の『卒業生』の語りから―」『ソシオロジ』58(2):21-37,141.

難波知子，2012,「学校制服の文化史―日本近代における女子生徒服装の変遷―」創元社

刑部芳則，2021,「セーラー服の誕生―女子校制服の近代史―」法政大学出版局

佐藤秀夫, 1976,「学校における制服の成立史―教育慣行の歴史的研究として―」『日本の教育史学』第 19 集，4–24.

志田未来，2021,「社会の周縁を生きる子どもたち―家族規範が生み出す生きづらさに関する研究―」明石書店

鈴木雅博，2016,「教師は曖昧な校則下での厳格な指導をどう論じたか―エスノメソドロジーのアプローチから―」『教育社会学研究』99:47-67.

田中敬文，2001,「教育費負担の現状と機会不平等」『家族社会学研究』12(2):175-183.

内田康弘，2015,「サポート校生徒は高校中退経験をどう生き抜くのか―スティグマと『前籍校』制服着装行動に着目して―」『子ども社会研究』21:95-108.

氏原陽子，1996,「中学校における男女平等と性差別の錯綜―二つの『隠れたカリキュラム』レベルから―」『教育社会学研究』58:29-45.

――――，2009,「隠れたカリキュラム概念の再考―ジェンダー研究の視点から―」『カリキュラム研究』18:17-30.

山口晶子，2007,「若者文化としての学校制服―女子高校生の制服おしゃれに着目して―」『子ども社会研究』13:62-71.

吉田美穂，2007,「『お世話モード』と『ぶつからない』統制システム―アカウンタビリティを背景とした『教育困難校』の生徒指導―」『教育社会学研究』81:89-109.